第九章　年中行事と伝説

一　年中行事

○一　月

年男が明(あき)の方を開いて若水を汲み、豆がらで燃しつけて、雑煮を作る。これは正月五日まで行われる。

門松はいつのことか、歳の神が原因になって大火があったとかで、それ以後長沢では立てないのが普通で、立てるのは二軒位、七草粥は作るが普通仕事はする。

八日　山の神を祭る。それまでは山へ行かない。

十三日　まゆ玉を作る。うち十六個は大きいのを作る。だるまに目玉を入れて祭る団子(だんご)は木の枝に刺すところもある。

十五日　小豆粥を作る。

十六日　便所へ赤い紙と仏壇の古い花を持って行って上げる。

二十日　夷講・女のハタオリの祝でだんごをつくり蚕に感謝するのである。

だんご日待　女の日待で部落毎に行なったもので、あんのないだんごをつくって、いろいろ話などをした。

○二　月

初午　御馳走をどっさりつくり稲荷様にあげ、そのおさがりをいただいた。もちろん、主人達の日待である。あづき飯をあげてそのおさがりをいただいた所もある。部落で祝う稲荷様もあれば、戸別に祝う稲荷様もある。赤・黄・青・紫・白（青・黄・赤・白・黒という人もある）の長い旗に「奉納正一位稲荷大明神」と書いてたてた。五色は五穀を意味しているのであり、作物がよくできるようにと稲荷様をまつったのであるという。また旗の字は子供がよく書いたが、その旗を字が上手になるようにと稲荷様にあげたのであるともいう。また、子供に非常に関係の深い日待である。子供たちが朝火をたいて神様にあげただんごやめざしのおさがりを焼いてたべたともいう。穀物ができるよう狐が稲荷の穂をくわえてきたので狐をまつるのだともいう。

節分　焼きかがしをつくり、ひいらぎでなく豆の枝の、表口、裏口へさした。

八日　夜鬼が来て履物に焼き判を押すというので、履物は全部家の中に入れる。ねぎ、とうがらしなどをいぶし戸口へ大きな籠をおいた。

十九日　馬方日待があった。いまの埼玉銀行の所に大きな塚があって、馬頭観音があった。いま本町の不動様の所へいっている。

〇三　月

節句　この日に奉公人出替り。

四日　総付合がある。部落中全部出て、年番の交替が行われる。酒の肴はコンニャクを短冊型に切って、とうがらしをまぶしたものである。なお、新しく部落入りした者は一升出して、仲間入りをした。

彼岸

○四　月

だんご日待　一月の所にも出ているが、長沢辺では四月に行なった。当番が家を廻って聞いて歩いて作ってくれた。行って汁位たべて、残りは家にもって帰る。

十五日　塩釜講・大和村高木の塩釜様へ代参を立ててお札をもらって来て分けた。永田・本町・加美・長沢などにはあった。

すすとりまい玉　四月下旬から五月上旬にかけて、あんこ入りのまんじゅうを作り、すすはきをした後、祝ってたべ、そのあとかいこをはいた。

○五　月

節句

田植え　植え手を大てい頼んで植えてもらった。お昼にも一杯飲むわけだが、新ジャガと鯡を出すのがきまり。

○六　月

○七　月

七夕　学校などに集まってやっていたが、家庭では普通おどりはしなかった。現今の七夕祭の隆盛は大したものである。

お盆

○八　月

盆は前には八月一日だった。天王様のお祭も一日だった。

○九　月

○十月

いのこぼたもち　十月には神様が出雲に集まっていないので、ぼたもちを作って蛙に持たせて神様に送りとどけたのだという。

二十日　（えびす講）あきない夷とよんで商人の夷講であったという。十月には神様が出雲にいって留守だが、えびす様だけは残っていてさびしいから、ごちそうするのだという話もある。普通全国的には、一月の二十日はえびす様が稼ぎに出かける日だが、十月の二十日には収穫をたずさえて帰ってくる日だと言われている（武田久吉著「農村の年中行事」より）。

○十一月

どじょうがゆ（別名麦まきがゆ）　麦まきが終ると、どじょうをとってきておかゆを作った。

○十二月

一日　川びたり、馬の正月とも言って馬を川へつれていった。馬持はもちをついて馬の無事を祝った。

八日　ふいごまつり

○その他　年中行事とは言えないが、「雨ごい」について記してみよう。

ひでりが続くと農家が困るのは当然であって、「雨ごい」をすることになる。宮本氏（宝蔵院）の広場に村中（福生村）から麦わらをもちよって、長さ十間位の竜を作り、大勢の人がかついで川原へ行って川の流れに投げ入れ、雨の降るように祈ったという（五十年位前まで）。竜をかつぐには、身体に鍋炭などをぬったり、竜を投げた後、酒をのみ飯をたべ太鼓をたたいてさわいだという。なお、竜のほかに雷を作って一緒にすてたともいう。雷でなく神様のすわる六尺四方位のみこしをつくり、それをかついですてたともいう。また、竜も雷も車にのせてひっぱったともいう。

竜などをかついで、「大嶽山の黒雲、これかかれ夕立」という歌を歌いながら歩いたともいう。竜などをすてる所は、永田の水神様の所から多西の方へ流れがつっかける「竜づけばけ」という所であったという。

念仏講・榛名講・おしら講・御嶽講等、講だけでもまだまだたくさんある。もちろん、年中行事が右に記しただけで全部ではなく、所により家によってちがっていることも勿論である。

昭和十九年の話題提供者

笹本エイジロウ氏（永田・数え年八十四才、以下年令は数え年）・森田与三郎氏（中福生八十三才）・川窪清七氏（中福生）・高橋氏（牛浜）・原島源兵衛氏（原ケ谷戸）・井上惣助氏（加美）・清水寛治氏（長沢）・木村辨蔵氏（中福生）

昭和三十二年の話題提供者

渡辺八三郎氏・清水延一氏（牛浜）・村野和助氏（本町）・森田殷史（中福生）・野島茂雄氏・野島浅次郎氏・野島為一氏・森谷宇一郎氏・吉田イソ氏（鍋一）・森田誠重氏・斎藤フク氏（鍋二）

昭和三十三年の話題提供者

田村富十郎氏（長沢）

二　伝　説

・ダイロクテン　牛浜に大きなケヤキがあって、ダイロクテンと言っていた。あまり高いので方々からよく見え目印になった。ケヤキの下にダイロクテンがまつってあったろう。

・念仏往生　念仏往生の話がある。神明社の横の墓地の入口の右に墓があるという。坊さんで生きながら念仏を唱えうめられ、三日三晩土中でお経をとなえていたという。

・力　　石　清巌院のところに大きな石があり、若い衆が力くらべのときに、ここまであがったなどと言って使ったという（写真14）。

・地頭井戸　鍋ケ谷戸に三つある。野島清二郎さんの裏と加藤さんの前と西村さんの南に。長塩という地頭が百姓が水に困っているので掘ってくれたという。

・神かくし　内出の島田さん（当主の二代前の事）の家で四つになる女の子が神かくしにあった。いくら探しても見つからないので、明日は川口の呼ばあり山（いま熊山のこと、この山へ行って迷子になった子の名を呼ぶと必ず発見されたという）へ行くことにした。その晩「オカカアニ」という声が庭でするので皆外に出てみると、柿の木の上に女の子がいたという。鍋一の野口さんの子守が急にいなくなったこともあるという。近所を探したが見つからない。明日は呼ばあり山へ行くという晩、ゴーッとすごい音がして間もなく外で「オツヤマ」という声がした。出てみると木の上に子守がいた。ゴーッという音は、天狗が子守をつれて通った音じゃあなかったかという。迷子を探すときには「迷子の迷子の○○出してたもーれ」とその迷子になった子の名前を何回も呼んだという。

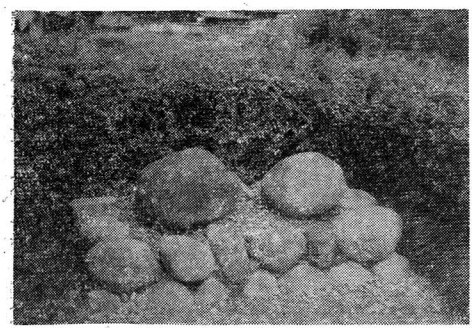

写真14. 清巌院門前の力石
（家は経塚である）

・馬坂・牛坂　中福生に馬坂、牛坂とよばれた坂がある。武田氏がタカツキ城の北条氏照を攻めたとき、馬で攻めたので通った所を馬坂、また牛で攻めたので、牛の通った坂を牛坂と言ったのだという。牛の尾にタイマツをつけたり、角に日本刀をつけて攻めたと語り伝えられているという。

・みこし　昔はおみこしは熊川の五日市線の鉄橋あたりまで福生分よ

り出向いたので、むかしは熊川村も福生村に含まれていたのだといわれる。

・堂　　前　永田に堂前と呼ばれる所がある。その西の方に昔堂があったといわれる。穀ビツがあって豊作のときなど、くめんのよい人がヒエなどを入れておき、飢饉の時困った人にくばったといわれる。また宮本橋の傍にも穀ビツがあったといわれる。

・松原長者と長者堀　かつて、熊川に長者堀という堀があった。これは昔、熊川の松原地内に長者がいて広大な邸に泉水をひき入れ、美しい庭を造ろうと考えた。ところが水の便がいたって悪く、そこで多摩川から水をひこうとしたが、これまた困難であった。いろいろ思案のあげく、石上明神から水をひき入れた。この水路は熊川旧道沿いの千歳屋さんの近くへ通して、熊川地内を流しようやくにして長者邸に入れ、わが家の泉水に楽しんだとか。つまり、その堀を長者堀と呼んだとかの伝説である。

・天気予報　伝説ではないかもしれないが、昔から言われている天気予報には次のようなものがある。

雨ふり山が雲をかぶると雨になる。雨ふり山とは大嶽の近くの山だという人と、大山の近くの山だという人がいる。そして雲のかぶり具合で、すぐ降るとか一日おいて降るとかいわれたという。

雨ふり山（大山の右の二子山）が見えると雨がふる。二子山の後は高い山だから晴天の時は後の山までみえて雨ふり山（二子山）ははっきり見えない。雨ふり山と後の山の間に雲がわくと雨ふり山がはっきり見え、そのようなときは雨がふる、というのである。

お月様が傘をかぶると雨がふる。傘の中に星がなければふらず、星一つみえれば次の日、星二つ傘の中にあれば翌々日雨がふる。

二十四時雲が出ると二十四時たって雨が降る。

夜でも昼でも黒い土手雲が空のへりに、堤防のように出ると近いうちに雨が降る。
八王子の方が夜明かるく見えることがある。そのような時は月が出ていても翌日雨が降る。くもっていても八王子の方が暗ければ雨は降らないと言われる。
雲が出て上にとぶと雨が降り、下をとぶと晴である。
富士山がほだつと風が吹く。
日のくれ富士山が見えるといつも晴だが見えないと天気が悪い。
夕やけが黒く消えると雨が降り、赤く、または白く消えると晴である。